

令和 2 年 5 月 14 日現在

機関番号：32653

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K11964

研究課題名(和文) 学士課程の小児看護学教育におけるアクティブ・ラーニングに関するルーブリックの作成

研究課題名(英文) PROPOSING A RUBRIC FOR ACTIVE LEARNING IN UNDERGRADUATE PEDIATRIC NURSING EDUCATION

研究代表者

奥野 順子 (OKUNO, Junko)

東京女子医科大学・看護学部・講師

研究者番号：30307649

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：看護系大学の小児看護学領域におけるアクティブ・ラーニングと評価方法の実態を明らかにするために全国調査を行った。講義や実習では約8割がレポート課題を、演習では約7割が紙上患者等のシミュレーション学修の方法を取り入れていた。これらの学修の評価については、成績に反映している割合は高いものの、評価項目がある割合や学生に提示する割合は低かった。

看護基礎教育に携わる大学教員にルーブリックの作成過程や活用の実態についてヒヤリング調査を行い、これらを踏まえて小児看護学の講義のアクティブ・ラーニングを用いた学修方法に対するルーブリックを提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

看護学系大学の小児看護学教育におけるアクティブ・ラーニングと評価の実態では、アクティブ・ラーニングとその学修評価の並行が不十分であったことなどから、学修評価の質の向上や教育環境の整備の必要があり、アクティブ・ラーニングを推進する上で取り組むべき課題が見いだされた。また、ルーブリックの作成過程や活用の実態、および小児看護学の講義のルーブリック案からは、ルーブリックを作成する上での手がかりを導くことができた。

研究成果の概要(英文)：A nationwide survey was conducted to clarify the actual situation of active learning and evaluation method in the pediatric nursing field of nursing universities. In lectures and clinical practice, approximately 80% included report assignments and in exercises, approximately 70% adopted the simulation-based learning method. Regarding the evaluation of the aforementioned learning, while a high percentage was reflected in the students' grades, the percentage including evaluation items and that to be presented to the students were low.

An interview was conducted on university faculty members engaged in basic nursing education with regard to the Rubric creation process and the actual situation of its application. Based on considerations thereof, a Rubric for active learning method targeting pediatric nursing lectures was proposed.

研究分野：看護教育

キーワード：ルーブリック 小児看護学 アクティブ・ラーニング

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

大学の教育内容の改革が進められ、能動的学修、アクティブ・ラーニング(以下AL)が積極的に取り込まれるようになってきている。看護学の中で子どもを取り巻く家族も対象とし、発達段階に応じた看護を学ぶ小児看護学では、子どもに接する機会が少ない学生に対する教育や複雑化している実習環境、限られた時間数などの教育上の課題がある。能動的な学修を育成するALはこのような課題に効果的な方法であると考え、我々は反転授業や協同教育などの学修方法を取り入れている(青木ら,2015)。これらの学修成果の評価にあたっては、客観性のある簡便な方法を模索している。

学生の学修成果の把握状況の調査によると、学修評価の観点/基準を決めたルーブリックの活用は7%であり(文部科学省,2015)。看護学学士課程の教育においても、ALの視点からの研究は少なく、ALの学修成果の評価ツールは開発されていない。そこで学修成果のルーブリックモデルを開発することによって、ALを推進し今後の小児看護学教育におけるALの学修モデルの基礎資料につなげたいとしたいと考えた。

2. 研究の目的

- (1)看護系大学学士課程の小児看護学領域の学内学習におけるALと評価方法の実態を明らかにする。
- (2)小児看護学教育のALの学修成果に関するルーブリックモデルを作成し提案する。

3. 研究の方法

(1)看護系大学学士課程の小児看護学領域のALと評価方法の実態について、全国調査を行った。対象者は日本看護系大学協議会に加盟している全大学の小児看護学領域の教育責任者とし、依頼文書を郵送の上、インターネットを通じて回答を得た。実習も含めて講義、演習、実習のそれぞれについて、ALの学修方法の実施の有無とその評価方法、ルーブリックの使用状況を調査した。本調査では演習は看護技術の習得に関する授業形態、実習は臨地にて展開する授業形態とした。

- (2) 国内の看護学教育におけるルーブリックの活用等に関して文献調査を実施した。
- (2) ルーブリックの先駆的な実践事例や評価ツールが整備されている事例校を選定し、ルーブリックの作成に関する調査を行った。対象者はルーブリックを実際に作成・活用している看護基礎教育を担当する大学教員で、ルーブリックの作成過程や活用の実態についてヒヤリングを行った。
- (2) 小児看護学の講義のALに関するルーブリックを検討し作成した。

*本研究でのルーブリックの構成・用語は表1である。

表1 ルーブリックの構成

	尺度A	尺度B	尺度C
観点/基準1	が~1である	が である	が 1である
観点/基準2	が~2である	がある	が 2である
観点/基準3	がxである	がある	が 3である

4. 研究成果

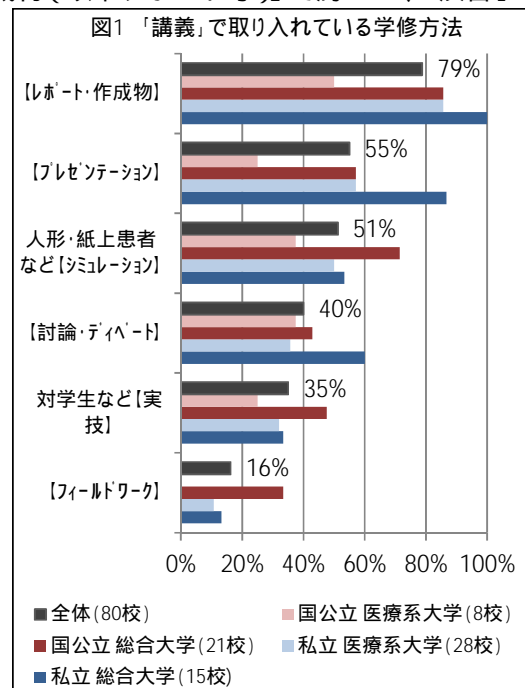
(1)全国の看護系大学学士課程の小児看護学教育におけるALの実態調査は対象校254校中、80校から有効回答が得られた(回答率31%)。調査は2017年3~6月に実施した。

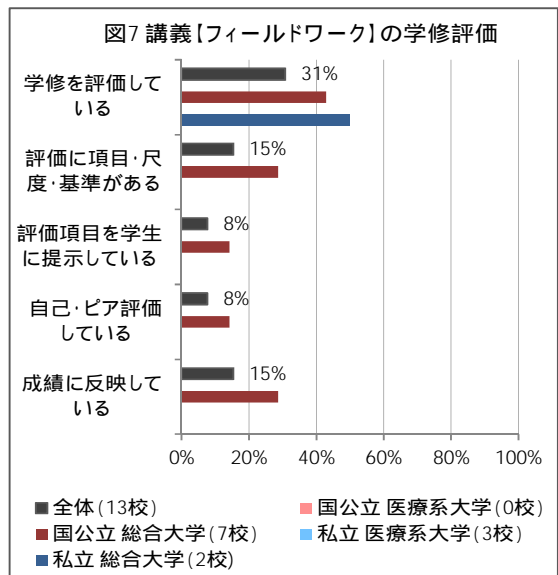
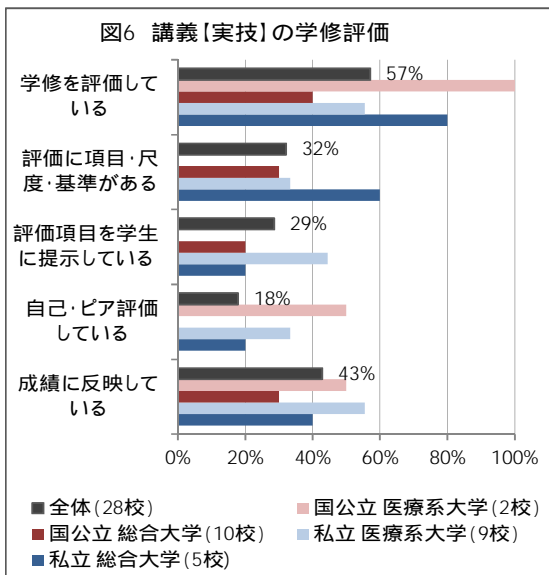
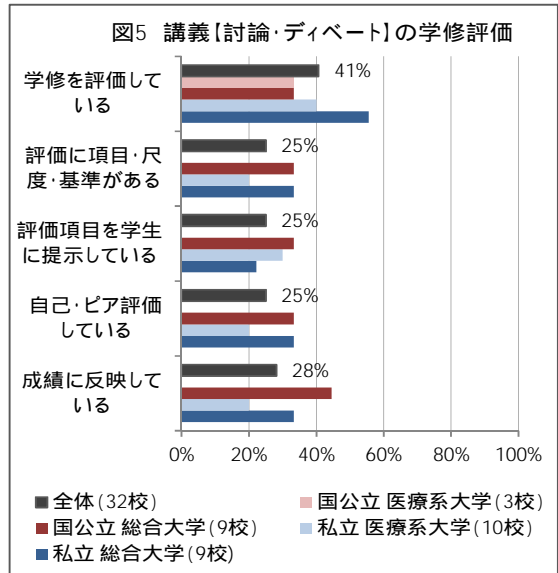
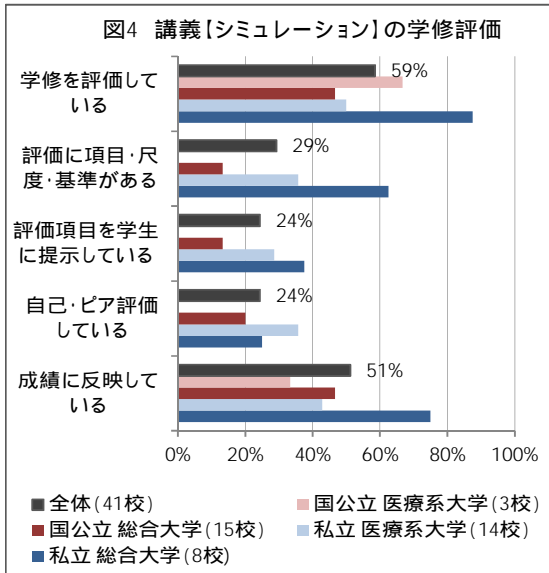
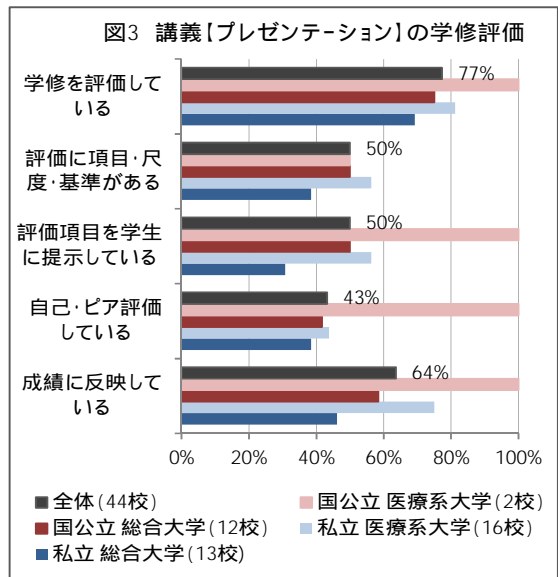
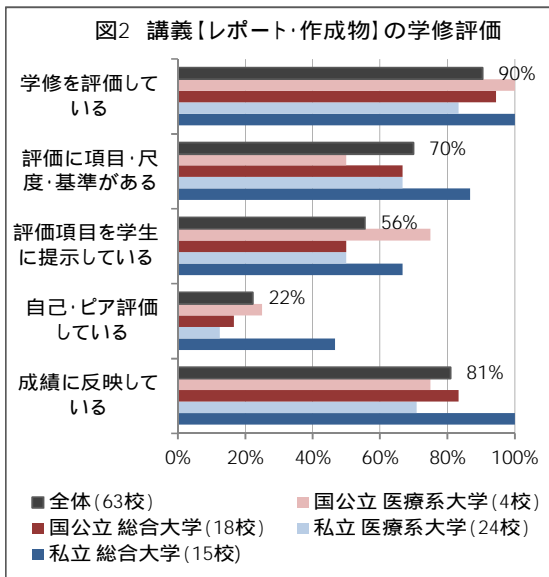
ALの学修方法と評価:「講義」、「演習」、「実習」の授業形態別に取り入れているALの学修方法は、「講義」と「実習」がともに【レポート・作成物(以下レポート等)】で約80%、「演習」では人形・紙上患者など【シミュレーション】が70%と最も高かった。

学修評価については、「講義」の【レポート等】は評価を成績に反映している64%、評価に項目・尺度・基準あり55%、評価項目の学生への提示44%であった。「実習」は【レポート等】に評価基準あり69%、学生への提示66%、成績に反映74%であった。一方「演習」の【シミュレーション】は評価基準あり32%、成績に反映36%であった。

「講義」におけるAL:「講義」を教育機関別にみると、私立の総合大学では全ての大学が【レポート等】を取り入れ、【プレゼンテーション】は8割以上が取り入れていた。国公立の医療系大学では他と比してALを取り入れている割合が低かった(図1)。

「講義」のALの学修評価は、【レポート等】では全体の9割が学修を評価し、8割は成績に反映していた(図2)。また【プレゼンテーション】や【シミュレーション】も学修の評価





や 成績に反映 の割合が5割以上であった(図3、4)。しかし 評価基準あり は【レポート等】で7割、【プレゼンテーション】は5割で、他の学修方法では1~3割程度であった。評価項目の学生への提示 も低かった(図2~7)。自己評価・ピア評価 など学生の評価への参加も【プレゼンテーション】を除いては1~2割程度であった。教育機関別では【プレゼンテーション】を除いて、私立の総合大学では全体的に学修評価の実施割合が高めであった。

ループリックの使用状況：ループリックを「使用している」は24%、「将来使用する予定」は20%、「使用していない」は48%であった。

(2) ルーブリックに関する文献調査の結果

・看護学教育のルーブリックに関する研究動向の文献調査(対象期間 1970年～2016年)では、論文の種類は会議録や解説/特集が多く、2013年に最初に発表された原著は近年増加傾向がみられた。論文内容はルーブリックの作成過程や導入事例の報告に関するものが多く、演習や実習に関するルーブリックがほとんどであった。

・看護基礎教育におけるルーブリックの活用・運用状況の推移と課題を文献調査した(対象期間 2008年～2018年)。2016年以降、発表数が急増し、実習に関する研究が最も多かった。課題としては、到達目標の明確化や表現表記、妥当性や整合性の問題、学生の学習到達度に応じた指導とフィードバック、教員と学生間の学習到達度に関する相互理解、学生のルーブリックに対する苦手意識や負担感の解消、教員の教育経験や他領域との調整などが上げられた。

(2) ルーブリックの作成に関するヒヤリング調査の結果

ルーブリックを作成・活用している看護基礎教育を担当する大学教員5名に対して、ルーブリックの作成過程や活用の実際をヒヤリング調査した(2017年)。ルーブリックの「観点(規準)」の設定は、大学や学科に共通のルーブリックではディプロマポリシーなどをふまえて科目の目的に共通する内容を、実習や学修課題では単元目標に基づいた内容を設定していた。また学生の学びや要望を取り入れて設定する場合もあった。「基準」は到達度が最も高い尺度からの設定、反対に及第点からなど様々であった。

作成にあたっては、一つの観点/規準・尺度に対して基準を一つにする工夫や点数化する場合の配点の困難などがあった。ルーブリックの活用では、成績評価以外に学生と教員との相互評価の指針とするなど、学修活動の支援ツールとして用いていた。活用の利点は、評価基準や達成度が明確になることで学生への指導のしやすさや教員間の評価の共通認識などであった。

(2) 小児看護学の講義に関するALとルーブリックの作成

研究者が所属する大学の小児看護学の講義でALを取り入れた単元は、子どもの発達段階に応じた生活援助、身体計測やバイタルサインの測定を含む子どものヘルスアセスメント、子どもの入院環境、災害や虐待を受けた子どもの看護、紙上患者を用いた子どもの看護の展開であり、方法としてはテキスト等を活用した反転学習、ジグソー法やペア学習などの協同学習を用いた。加えて、一斉講義が中心の小児保健などの単元は、講義内容に関して学生自身が試験問題と解説を作成する課題も取り入れた。学修にあたって学生には、事前にルーブリックと同様の内容を評価の視点として簡潔に示し、学修の到達内容を共有した。成績評価の対象は成果物(課題の提出物)とし、成績に反映した。

これらのALで使用しているルーブリックについて、これまでの研究成果をふまえて再検討し、表2に提案した(最終ページに掲載)。ルーブリックの作成や見直しにあたってのポイントは、「観点/規準」は学修目標に準拠していること、「尺度」は学生の実態を踏まえた到達度を見通していること、「基準」は分かりやすく客観性のある表記であることなどである。使用毎、学生の意見を取り入れたり教員間で意見交換したりして、ブラッシュアップすることが最も重要であり、この意味で提示したルーブリックは作成途上にある。

(3) 課題と今後の展望

全国調査の回答率3割であったことから、全国のALの実態を反映しているとは言い難いが、次の点が考えられた。ALを取り入れている場合でも学修評価が並行されていないこと、評価項目の設定がなされず評価が行われている可能性があること、学生への提示や学生自身の評価への関わりが少ないことである。さらに教育機関別の実施状況の差は、マンパワーや大学の教育方針などが一因とも推察された。

学生の主体的な学びを促すALの、学修評価のツールであるルーブリックであるが故、ルーブリックを活用することでさらに学生の学びを深めることが可能となる。学生には課題とともにルーブリックを提示して、学修の到達内容・目指す方向や内容を共有し、学生とともに達成度を評価することで、より有効な活用となり得る。客観性のある評価ツールを意図して作成するものの具体的な表記には限界がある。よってルーブリックの活用においては、教員は学生に対して、学生個々の経験事象と表記内容(特に基準)がつながるよう支援する役割があると考えられる。

表2 小児看護学の講義における学修課題とルーブリックの例

学修課題、[学修方法]	観点	規準	尺度		
					(>_<)
講義内容に関する試験問題と解答を作成する [事後学習]	知識・技能	日本語の文章の適切性	問題・解答の文章は、適切な漢字を用いており、誤字がなく、主語・述語は一致するなど日本語を正しく用いて、所定の枠内に記載されている	問題・解答の文章に誤字や主語・述語の不一致など一部不適切な部分がある、判読できない部分がある、枠外記載が多い	日本語として成立しない、誤字が多い、判読できない
		問いの指示の適切性	問題文は、解答の仕方が誰にでも分かるように指示している	問題文が抽象的または、中途半端な指示など、解答の仕方が分かりづらい	解答の仕方が不明、指示がないなど
	思考・判断・表現	重要事項の把握	本講義の学習内容の中で、重要な事項を取り上げている	本講義で取り上げた事項だが、あまり重要ではない	重要事項ではない、単元が間違っている
	知識・技能	内容の正確性	問題および解説を含めた解答の内容は正確である	問題および解説を含めた解答の内容は曖昧・不確かである	知識が明らかに間違っている
	思考・判断・表現	知識の活用（知識の再構成）	発達などこれまでの学習から得られた知識を活用した問題・解答である	本講義で得られた知識を工夫した問題・解答である	ほぼテキストや資料からの抜き書きである
各発達段階の子どもの1日の過ごし方、成長・発達の特徴、生活援助の内容・方法を記述する (1歳6か月、4歳、9歳、14歳) [反転学習と協同学習]	知識・技能	標準的な1日の過ごし方	発達段階に応じた子どもの標準的な1日の生活が記載されている		標準的な1日の過ごし方ではない
	思考・判断・表現	成長・発達の特徴	成長・発達の特徴を示す重要事項がほぼ記述されている	成長・発達の特徴を示す重要事項が不足している、または一部誤りがある	成長・発達の特徴を示す重要事項が記述されていない
	知識・技能	生活や成長・発達に合わせた、生活援助の内容・方法	子どもの生活や成長・発達に合わせた生活援助の内容・方法が記載されている	生活援助の内容・方法が子どもの生活、または成長・発達に合わせた内容でない	生活援助の内容・方法が記載されていない、または生活や成長発達に合わせた内容でない
乳児のVSと計測についてそれぞれ注意点を挙げる、順番を述べる、測定値を評価する [反転学習]	知識・技能	測定技術の注意点(ポイントも含む)の把握	VS、計測ともに乳児の測定手順のポイントと発達上の安全(転落、保温、清潔等)への配慮が記載されている	VS、計測のどちらか極端に注意点・ポイントの内容が不足している VS、計測ともに注意点・ポイントの内容が不足している	VS、計測ともに測定のポイントがない
	思考・判断・表現	測定順番の理解	VSと計測の測定の順番と理由が正確性と苦痛面から判断している		VS、計測ともに測定順番と理由が乳児に不適切
		評価の適切性	VS、計測ともに項目ごと評価し、統合したアセスメントである	VS、計測のどちらかの評価が間違っている	VS、計測ともに評価が間違っている
子どもの入院環境(物理的環境・人的環境)について、教科書やインターネットなどを活用して、成人との違いを調べ、その理由を記述する [反転学習と協同学習]	知識・技能	子どもの入院環境の事実	複数の項目を選び、成人との違いの記載である	項目数が少ない、または成人との違いの記載ではない	項目数が少ない、かつ成人との違いの記載ではない
	思考・判断・表現	子どもの入院環境の理由	安全確保、成長・発達、子どもの権利の保障、生活の場などの理由が3つ以上書かれている	～の理由が1つ以上書かれている	～の理由が1つも書かれていない
	態度	提出方法	指示通りの提出である		指示通りの提出でない
虐待または災害を受けた子どもの看護について、学習内容～について、要点を用紙にまとめる(学習内容略) [反転学習と協同学習]	知識・技能	要点の整理	学習内容の全てについて、要点を整理し記載されている	学習内容について、1部要点が記載されていない	学習内容について記載されていない項目がある
		判読可能な記述	適切な日本語を用いて、判読可能な記述である		判読可能な記述ではない
子どもの看護展開 1.紙上患者Aちゃんの「生活行動を支えるもの」について、根拠を明確にして分析・解釈する 2.症状や治療、入院によるAちゃんの「生活行動」について、一般的な発達をふまえて判断する 3.援助が必要な項目ごとにどうなって欲しいか、目指すゴールを具体的に記入する 4.項目ごとにゴール達成に向けた計画を立てる [反転学習と協同学習]	知識・技能	成長の評価	パーセントイル法の評価が正しい		パーセントイル法の評価ができない
	思考・判断・表現	恒常性を維持するしくみの査定	発達や症状を関連づけた査定である	発達の関連づけがない、症状の意味づけにとどまる	ほとんどが情報の羅列である
		生活行動の影響の判断	発達、症状、治療、入院を関連づけた査定である	発達、症状、治療、入院の関連づけに不足がある ケアの方向性にとどまる	ほとんどが情報の羅列である
		援助の方向性	援助の方向性が看護として適切である		方向性の理解ができていない
		計画	発達や健康レベルに関連づけ、ゴールに対する個別のある計画である	健康面または一般的な発達に偏った計画である 健康レベルの関連づけに不適が多い	看護計画ではない

引用文献

文部科学省(2015).平成25年度の大学における教育内容等の改革状況について.

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2016/05/12/1361916_1.pdf

青木雅子,奥野順子,関森みゆき,他(2015).学生が試験問題を作成するアクティブ・ラーニングの展開.東京女子医科大学看護学会誌,11(1),54-60.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小宮山陽子、青木雅子、櫻田章子、奥野順子、関森みゆき、酒井麻希、日沼千尋	4. 巻 Vol.14 No.1
2. 論文標題 看護基礎教育におけるルーブリックの推移と課題に関する文献調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京女子医科大学看護学会誌	6. 最初と最後の頁 15～22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 櫻田章子、小宮山陽子、奥野順子、関森みゆき、青木雅子、酒井麻希、日沼千尋
2. 発表標題 看護基礎教育におけるルーブリックの作成過程と活用の実際に関する調査
3. 学会等名 日本看護学教育学会 第28回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 関森みゆき、青木雅子、奥野順子、櫻田章子、小宮山陽子、酒井麻希、日沼千尋
2. 発表標題 学士課程の小児看護学教育におけるアクティブ・ラーニングの実態
3. 学会等名 日本小児看護学会第28回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 櫻田章子、小宮山陽子、奥野順子、関森みゆき、青木雅子、酒井麻希、日沼千尋
2. 発表標題 看護学教育におけるルーブリックに関する文献検討
3. 学会等名 東京女子医科大学看護学会第13回学術集会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	関森 みゆき (SEKIMORI Miyuki) (00313867)	武蔵野大学・看護学部・教授 (32680)	
研究分担者	櫻田 章子 (SAKURADA Akiko) (20535504)	東京女子医科大学・看護学部・助教 (32653)	
研究分担者	小宮山 陽子 (KOMIYAMA Yoko) (50721966)	東京女子医科大学・看護学部・講師 (32653)	
研究分担者	青木 雅子 (AOKI Masako) (00453415)	東京女子医科大学・看護学部・教授 (32653)	
研究分担者	日沼 千尋 (HINUMA Chihiro) (40248927)	東京女子医科大学・看護学部・名誉教授 (32653)	
研究分担者	木戸 恵美 (市川恵美) (KIDO Emi) (30457808)	東京女子医科大学・看護学部・助教 (32653)	削除：2018年3月12日
研究協力者	酒井 麻希 (SAKAI Maki)		